

## 小林杜人と転向

綱 沢 満 昭

強弱は別として一人の人間が、ある確かな（本人がそう思うもの）思想、信念に基づいて行動している時、その思想・信念およびその行動が、国家強制力によって抑圧、弾圧され、その権力に妥協し、敗北せざるをえなくなること転向と呼んでよからう。

静かに日本の近代思想史を鳥瞰する時、この転向と無縁で存在しうる思想などというものが、はたして存在しえるものかという思いを抱くのは私一人ではあるまい。

私たちはこれまで、ありがたいことに、転向研究に関する貴重な遺産を持っている。なかでも、昭和三十七年に完成した「思想の科学研究会」による『共同研究・転向』（上、中・下、平凡社）は、質・量の両面において他の追隨を許さぬほどのものであった。

本来、転向という問題は、なにも昭和の時代に限定

されるものではない。この『共同研究・転向』の「序文」を書いた鶴見俊輔は、そのなかで、こうのべている。

「日本思想史における転向史は、すくなくとも百年さかのぼって、幕末からはじめ、明治の開化、さらに自由民権運動にたいする弾圧をへて、大正・昭和に至るべきである。このようにしてはじめて、日本の近代思想の原型形成においてはたらいだ転向の刻印が明かにされよう。」<sup>(1)</sup>

しかし、この鶴見らの共同研究は、昭和時代という時間的枠組みのなかで展開されていた。鶴見は、これまで転向の問題は、思想史の世界では、何故か、あまり喜ばれる対象ではなかったという。その理由として彼は次のようなことをあげている。

「転向という主題をとりあげることの不快」<sup>(2)</sup>、「転向

を対象として厳密な意味で学問的な研究をすることの困難<sup>(3)</sup>、「転向研究の無意味<sup>(4)</sup>」。

こういった状況を克服して、この研究は完成されたわけであるが、鶴見は、転向の持っている思想的価値を、次のように記している。

「転向問題に直面しない思想というのは、子供の思想、親がかりの学生の思想なのであって、いわばタミの上でする水泳にすぎない。就職、結婚、地位の変化にともなうさまざまな圧力にたえて、なんらかの転向をなしつつ思想を行動化してゆくことこそ、成人の思想であるといえよう。」<sup>(5)</sup>

ところで、鶴見たちは、転向を次のように定義したのであった。

「私たちは、転向を『権力によって強制されたためにおこる思想の変化』と定義したい。」<sup>(6)</sup>

この場合の権力で、重要なことは、国家権力ということであって、「現代日本の転向を記述する上で、中心となるのも、国家権力によつて強制された思想変化であり、<sup>(7)</sup>」という。

当然のことであるが、表面的に自発的、自主的と思われるような思想的変容であっても、その前提に、あ

るいは基底に国家による強制というものが存在するとなれば、それはそれで、転向だとして鶴見は次のような例をあげている。

「たとえばある個人が、帝国主義反対運動の故をもつて検挙されたという事実があり、それと時間的に近接して、同じ個人が当時の国策である『満州国<sup>(8)</sup>』建設を讃美する文章を発表したという事実があるなら、その間の思想の変化が当人によつて自発的なものと意識されているとしても、この変化は転向と言えよう。」<sup>(9)</sup>

鶴見らの、この『共同研究・転向』の「上巻」が世に出たのが、昭和三十四年一月であったが、同年の九月に、本多秋五が本書についての書評を書いている。この書評は、よくある単なる本の紹介などと違って、精緻にして鋭い本格的なものであった。本多はこの書を手にした時、その質と量に驚嘆したという。本書の画期的意味について彼はこうのべている。

「この本の最大の特徴は、いまいう転向概念からの『倫理の脱色』とならんで、転向という言葉の定義——『権力によつて強制されたためにおこる思想の変化』という定義——にある。これがやはり一番大きな、性格的特徴である。この定義によつて、転向研究は大変自由

なものとなり、無礙なものとなった。<sup>(10)</sup>

転向に関する秀作を待ち望んでいた本多は、この書に間違いなく合格点を与えたのである。これが契機となって、この種の研究が活発化し、将来に向けて大きな展望が開けてくると評価し、本書に対して彼は惜しみなき賛辞を与えた。しかし、本書の「有効性」を認めつつも、若干の疑問点がないではないと、次のようにいうことも忘れはしなかった。

「しかし、有効性の寿命は案外あてにならないものである。やはり『革命の脱色』という一点に問題が残ると思う。……(略)……別の転向定義を要求する転向論、革命をテーマとする転向論が存在するはずである。<sup>(11)</sup>」

この本多秋五が転向を次の三種類に分けたことは、よく知られているところである。

まず、「共産主義者の共産主義放棄を意味する転向<sup>(12)</sup>」、次いで「加藤弘之も森鷗外も徳富蘇峰も転向者であったという場合の、一般に進歩的合理主義的思想の放棄を意味する転向<sup>(13)</sup>」、いま一つは、「思想的回転(回心)現象一般をさす<sup>(14)</sup>」ものである。

日本の知識人たちが、日本の伝統的社会、宗教、習俗といったものの実態を精査、認識することなく、借

用理論を信仰したことから転向は発生することはいうまでもないが、吉本隆明はそのことを的確に指摘している。

「わたしの欲求からは、転向とはなにを意味するかは、明瞭である。それは、日本の近代社会の構造を、総体のヴィジョンとしてつかまえそこなったために、インテリゲンチヤの間におこった思考変換をさしている、<sup>(15)</sup>」

ところで、この転向の日本近代思想史上での意義について言及する際、いま一つ傾聴に値する指摘を私たちは持っている。それは、橋川文三のそれである。

彼は転向という問題は、「わが国の近代思想史において、はじめて本来的な思想の意味を悲劇的に、かつ逆説的に明らかにしたという意味で、また、およそ思想とよばれるものが生の根底的現実ともつとも究極的に交渉する場合、そこにどのようなすさまじいドラマが展開するかを露呈したという意味で、おそらく幕末、明治の動乱期をのぞいて、もつとも痛烈な思想史上の一エポックを形成した。<sup>(16)</sup>」とのべたのである。真の思想の名に値するものは何か。血肉化されていない借り物思想が、現実世界に直面した時、そこに如何なる状

況が生れるか。如何なる悲劇、喜劇が生れるか。日本における転向の問題は、そういうことを示唆してくれていると橋川はいう。

転向をめぐって、これまで様々な定義、議論、そして日本の近代思想史上での意味が問われてきた。いま、日本には、極端な破壊活動排除を除けば、かつてのようないかなる政治的弾圧、抹殺はない。自由な思想が、運動が、学問が、それぞれの領域で展開されているようである。こういう時代には、転向研究などは、もはやいかなる意味をも持たないということになるのか。いかなる信念も哲学も思想も持つ必要はなく、むしろそのようなものを持つことが軽蔑されるような雰囲気の中にあることは、転向など、はなから問題になることはなからう。たしかに、いま、赤裸々な物理的弾圧、排除はない。しかし、民衆の統治技術は、マス・メディアを中心として、その粹を集め、その統治は実に巧妙になされ、民衆の側は、およそ被支配者意識など持ちえないものかもしれない。理性の狡知もいよいよその成熟度を増しているようである。管理強化と「癒し」という両刀を使いつつ、操縦するという構図が完成されている。思想の領域においても、いまや最高の権力というものは、

極めて懐の深い、しかも強力な吸引能力装置を用意していて、浅慮な反権力的思想などは、喜々として吸収している。強引な物理的弾圧などで転向を強要する必要などないのである。権力というものは、いつの世においても、相当のところまで、己に向けての攻撃を許容しつつ、最終的には、そのエネルギーをも己の栄養にしてゆくといった逞しさと巧妙さを備えている。

荒ぶる霊をも、じつに巧妙で、持続的な「癒し」によって、次第に和霊にしてしまうというプロセスは、王権支配が採用する常套手段である。和霊と化したものは、かつての敵に忠誠を誓い、そちらの側で有効なはたらきをする。かつて燃やした生命の炎は、方向を転換しつつ、なお激しく燃えあがる。

本稿で取り上げようとする小林杜人は、転向者の一人であるが、彼はいかなる経路を辿り、いかなる和霊になっていったのであろうか。

小林杜人は、若くして己を取り巻く環境のなかでの種々の日常性に、社会的矛盾を発見し、疑問視し、それによって苦悩し、社会に向ける目を鋭く、広く養っ

ていった。家業である農業、養蚕に従事しながら、マルクス主義に邂逅し、農民、労働運動に奔走する。やがて検挙され、獄中での生活を余儀なくされる。絶え間ない苦しみの結果、身心ともにボロボロとなり、自殺を図るが失敗する。獄中での教誨師との出会いにより、宗教的救いを獲得し、やがて転向する。一転し、かつて己が信じ、行っていた社会的活動すべてのプライドを放擲し、マルキシズムも清算する。自力の無力、無効を自覚し、如来への帰依、そして新しい道を選択する。出獄後は、帝国更新会という組織に入り、国家のため多くの人の転向を促し、転向者救済のために懸命の努力をしたのである。彼は単にそれまでの思想を捨て、運動をやめたというだけではなく、非転向者に対しては転向の「正しさ」を説き、奨励し、転向者に対しては、社会復帰のための就職をはじめ、あらゆる援助を惜しまなかった。小林は転向前後も、真面目で、禁欲的で、誠実を日常としていた。彼のこの資質は、社会主義運動、農民運動、そしてまた国家権力への協力の際にも貫かれていった。国家が用意する民衆統治のための真面目主義は、小林の持っていた資質そのものでもあったということでもある。次のような役

割を担わされるのは当然のことであった。

『「転向」方策が軌道にのり、『転向』者が増えてくると、行刑のつぎの段階として、再犯の防止と『転向』を確保するために、『保護』事業が重視されるようになった……（略）……その先駆は、東京地裁検事正の宮城長五郎の主宰する帝国更新会（市ヶ谷刑務所教務主任の藤井恵照が常務理事）で、三一年末に仮釈放された小林杜人を専従に、多数の『転向』者を受け入れ、三四年末には思想部を独立させた。<sup>(17)</sup>

ここで、昭和の転向史のなかで、このような生き方をした小林の帝国更新会で活躍するまでの略年譜を作っておこう。（小林の著である『「転向期」のひとびと<sup>(18)</sup>』を中心に）

明治三十五年（一九〇二）——二月十五日、長野県埴科郡雨宮県村大字土口に生れる。父友喜、母ふく。農業と蚕種製造を家業とする。

大正三年（一九一四）——小学校卒業、埴科農蚕学校入学。ハイネ、ダンテ、トルストイ、ドストエフスキーなどを読む。

大正六年（一九一七）——埴科農蚕学校卒業後家業を

手伝う。不当な被差別者との交流を始め、信濃同仁会雨宮支部の組織化に参加。山室軍平に注目し、救世軍長野小隊に入隊。

大正七年（一九一八）―五月より長野県蚕業取締所殖科支所の書記となる。

大正十年（一九二一）―信濃自由大学に学ぶ。土田杏村、高倉テルを知る。有島武郎、内村鑑三、西田幾多郎、倉田百三などの著作を読む。

大正十二年（一九二三）―一月近衛歩兵第三連隊に入隊するが、病のため入院、四月には第一衛戍病院に移り、看護兵となる。

大正十三年（一九二四）―七月に除隊、家業を手伝う。北信社会主義グループの研究会、政治問題研究会北信支部に参加、理不尽な職業、住居の差別に対し強力に反対する。日常的差別の深さを知る。

大正十四年（一九二五）―全日本無産青年同盟設立の準備会が開催され、北信支部ではたらく。この同盟の創立大会に北信支部の代表として出席したが、その結果村役場の書記を解雇される。

大正十五年（一九二六）―日本農民組合を支持する長野県小作組合連合準備会、労働農民党北信支部

準備会の設立が決定され、小林宅が一時的に事務所となる。「いもち」が発生し、稲作は大きな被害にあい、北信、中信に小作争議激増。小林は多忙を極める。

昭和二年（一九二七）―金融恐慌により長野県下の農民運動激化。長野県の小作組合連合会創立大会が開催され、日本農民組合に加盟。小林は組合の常務理事になる。労働農民党全国大会が開催され、委員長に大山郁夫、小林は中央執行委員となる。

昭和三年（一九二八）―労働農民党中央執行委員会に出席。日本共産党に入党。北信の責任者となる。日本共産党への大弾圧があり、小林も検挙される。家族への愛情と同志への思いの間で苦悩し、獄中自殺を図るが、失敗する。懲役三年六ヶ月の判決がくだり、控訴する。

昭和四年（一九二九）―藤井恵照教師に出会い、敬意を抱き心酔する。親鸞をはじめ、島地大等、清沢満之らの著書に触れる。控訴を取り下げる。この藤井との出会いが、のちの帝国更新会での活動につながる。

昭和五年（一九三〇）―独房から図書室へ通うとい



う教務課の仕事につく。

昭和六年（一九三一）——宗教への理解も深まり、苦悩脱却の光が見えてくる。健康状態も良好。母親死去。刑期は昭和七年四月ということになっていたが、年末に仮釈放となる。これより帝国更新会に勤務。本会の保護委員として業務に尽力する。

昭和九年（一九三四）——帝国更新会のなかに、思想部が設けられ、小林はその責任者となって活躍する。

以上が小林の帝国更新会で活躍するまでの歩みであるが、彼の世の中の不正、矛盾への開眼は、極めて具體的、日常的体験に基づくものであった。大学という場所でも、資本主義経済、土地制度の矛盾などを抽象的に学習するというものではなかった。

小野陽一というペンネームで著した『共産党を脱する迄<sup>(19)</sup>』という本があるが、このなかで、かつての己の行動を深く反省し、懺悔する箇所がある。長野県宮内村における同仁会支部の創立大会時においてである。こういうものであった。

「小野の級が六年を卒業する時、記念撮影をするところになって居た。其の時全級の者共が申合せて、若し

水平社の同人が一人でもまぢると写真を買はぬと云ふことに決議したのである。そして此の同人三人を追っ払って、とうとう写真をとらせなかったのである。其の外のことは数限りない。……（略）……この日泣きながら、それを告白したのであった。そして、『皆さん、どうか許して下さい。此の通り謝罪します』<sup>(20)</sup>」

さらに差別の問題で、小林の若い魂を動揺させた事件があった。靴製造、修理を仕事としていた小林の友人が、水平社の同人であるという、いわれなき理由で店の他所への移転を拒否された時のことである。小林はこの理不尽な差別に対し、怒り苦しみ、東奔西走し、やつとの思いで友人有利の方向で解決したのである。

『共産党を脱する迄』で、こう記している。

「この事件は小野に、水平社同人等に対し、社会に浸透せる因襲的差別の如何に根強いものであるかを覺らしめた。小野の心は一時はテロリストにならんとした程であった。小野は世間から如何に嘲笑されても、同人等と今后益々差別的撤廢のために奮闘する決意を固めたのである。<sup>(21)</sup>」

いま一つ小林に社会的矛盾への開眼を促したものは、キリスト教である。苦勞しつつ、同志社で学び、日本

救世軍の創設に尽した山室軍平に邂逅し、彼に強く心を打たれ入信した。神の前における平等、そのために悪旧習の打破といったものに小林の心は吸い込まれていった。

小林は己の心中を、常時一点の曇りもない状態にしておきたかった。いつ、どこでも、不正、虚偽、偽善などのない精神を維持し、政治の世界での駆引きなどを極力嫌った。自己反省的であり、真面目主義を通した。この差別の実態、己の加害者としての罪の重さを自覚し、これを機会に、小林は社会的矛盾を解消し、弱者への全面的支援へ向けての実践活動に全身全霊を捧げることを誓うのである。彼の農民運動、労農提携、差別撤廃など、すべて彼の日常からの発信であった。

このような外での活動をしながらも、小林は家業にも全力を傾注するのである。限界まで汗を流し、血を流すのである。

「彼はどんなに働いたであろう。あの山の畑に汗だくだくになって働いていた。……（略）……春は雲雀の声を聞いて麦の草をとり耕耘に働いた。人糞に大豆粕や、過磷酸石灰等をまぜたのを肥料に入れ荷車に積んで、田畑に選ぶこともあった。……（略）……一日

こうして働く、アンモニアの臭いで身体中まで臭くなって、二日位は抜けなかった。こんな時でも小野は、集会に出ることを怠らなかつた。集会にはいつも其の司会者であつたのだ。<sup>(22)</sup>」

家業と社会運動との両立は、小林の真面目さゆえに、極めて過酷なものとなっていた。両者に軽重をつけることの出来ない小林は、ボロボロになった肉体を引きずりながらの日常を余儀なくされていった。このことは、後の彼の転向理由にも大きく影響することとなる。

農村問題に全生命を賭して闘う小林の活動は、地元はいうまでもなく、県で知られ、漸次拡大していった。そうした彼の顔を日本共産党が見逃すはずはない。遂に誘いの手が延びることになる。

「昭和三年一月十五、十六日、労働農民党中央執行委員会に出席、のちに邂逅する南喜一、浅野晃、豊田直らを知る。同一月二十一日、上條寛雄の紹介で信越地方委員会オルガナイザー河合悦三より日本共産党に入党勧誘を受け承諾し、以後、日共党员として北信の責任者となる。<sup>(23)</sup>」

かくして小林は日本共産党の党员となり、ある種の使命と覚悟を感じ、大車輪的活躍を己に言い聞かせ



ている。共産党に対する当時の一般的社会的評価とは別に、いわゆる知識人や学生、労働運動、農民運動にかかわっていた人たちにとっては、極めて崇高にして、日本の近代「知」の集結した威厳のある存在であった。小林もこの組織の一員になることは、何か重々しい、大きな力の支援を獲得したように感じたようである。

「小野自身も党に加盟したが、彼の無産運動者としての歴史の一区画となったのである。それからの小野は強くなった。何とはなしに彼は一つの魔力を自分に得た様に思へた。それから検挙される迄の小野の活動は目ざましいものであった。<sup>(24)</sup>」

大きく強い力が己の背を押してくれているという安堵の思いと同時に、頑強な拘束力という緊張感もあったにちがいない。積極的使命感と自己拘束力感とが混交していたであろう。

しかし小林が党员として活躍出来た期間は極めて短い。昭和三年一月二十一日に入党したが、同年の三一五事件で、はやくも検挙されているのである。

昭和三年三月十五日は、いうまでもなく、日本共産党に対し大弾圧のあった日である。天皇制、国体、私有財産などで党の方針を打ち出した共産党に敏感に反

応した国家権力は、大正十四年に公布された治安維持法を改正、強化し、共産主義運動、思想の撲滅を図らんとしたのである。小林は己の検挙を次のように回想している。

「私もこの日未明、日本農民組合長野連合会本部、労働農民党北信支部事務所、屋代警察署に検挙された。事務所責任者として家宅捜査に立ち会い日共の検挙であることを知った。……（略）……母は信濃毎日新聞記者に涙ながらにわが子のことを語りしとか。翌日、雨宮県小学校長馬場源六は、全校生徒に『わが村より不忠の臣を出した』ことについて訓辞、わが妹は衝激を受けたりと聞く。屋代町付近の町村は、大逆事件以後はじめて恐怖震撼せりと。<sup>(25)</sup>」

国体そのものを批判し、私有財産制を否定するなどといった日本共産党が、当時の一般民衆の日常的思惟からは大きくかけ離れた存在であり、それは恐怖の対象ともなっていた。その組織に入り、しかも官憲によって検挙され、投獄されたとあつては、当時、家族にとつて、村落共同体にとつても、これ以上の恥、不名誉なことはなかったのである。

ここから小林の獄中生活が始まるのであるが、検挙

された時の彼の心情は、これまた、極端に正直で、素直で、己の活動が罪を犯したのであれば、正直にその罪を認め、責任を負うというのである。小林の主義、主張、そして行動が、己の確たる信念に基づいたものであったとすれば、この正直さ、素直さを勇氣あることとみるのか、なんという腑甲斐無きこととみるかは微妙なところである。

「小野は今度の事件について正式に党に加盟したのは、北信では自分一人であるし、他のものに迷惑にならぬと思ったので、初めから自分のことだけは自白して、早く片付けたいと思つてゐた。またやったことを隠してゐて自白せぬことは、自分で卑怯だと思つて居たために、小野の最初の煩悶は初まつたのである。」<sup>(26)</sup>

ここで私は、小林が獄中で苦しみ、悩み、己自身と文字通り生命がけの格闘をした内容のいくつかを取り出してみたい。それは転向そのものの動機の検討でもある。

まず、小林の心情を大きく揺さぶつたのは、なんと言つても、家族への情愛である。転向者の多くが転向

の動機とした家族の問題<sup>(27)</sup>が、小林の眼前においてもせまつていた。農民運動、共産主義運動か、家族への愛か。己が獄につながれることで、家族、親類縁者にかける迷惑、なかならず、貧困にあえぎ、血涙を流しながら、無言で一蹴を打ちおろす父母のやつれた姿を想像する時、彼の腸はよじれんばかりであつた。それでも抽象的階級闘争やコミンテルンの方針に沿つた闘いを続行してゆけるというのか。しかし、そうかと言つて、共に闘つてきた同志も裏切れない。小林は肉も精神も引き裂かれんばかりであつた。父母への思いを彼はこう語るのであつた。

「小野は獄中で父母を思ふ時に、俺は社会的功名心などは、かなぐり捨て、風呂の火番でもやらうと思つた。それはどんなに楽しいであらう。父や母が一日働いた体のつかれを洗ひ落すかの様に嬉しそうに湯に入る、その湯の番をする。あの薪を燃やす度に、風は煙りを小野の顔に吹き捲くるであらう、煙にむせた顔をして一生懸命に火を燃やす。そして父母の身体を洗つてやる。」<sup>(28)</sup>

政治支配貫徹のための常套手段として物理的強制力のほかに、心理的操作があることは、いつの時代、い

かなる社会においても、いうまでもないことであるが、民主主義だの自由主義だのが声高に叫ばれる場において、後者が有効性を発揮することは当然のことである。

転向への誘動は、家族への情が巧みに利用されていた。国家権力と対決は出来ても、家族との対決は、そうやすやすと出来るものではない。国家を欺くことは可能でも、父母兄弟、姉妹を欺くことは不可能にかい。現存する家族のみならず、現世不在の先祖たち、そして将来生れくるであろう子や孫に対しても、家の意識は連続している。

ところが、家、家族を思う心情は、多くの場合、反体制、反権力運動の支柱になることはなく、逆にその運動を阻止し、支配権力の体制のなかに埋没させられてゆく運命にある。近代日本の「家の思想」がここにはある。従って、個人の自由を拘束し、奪い、自主、自立、独立を邪魔する家からの解放こそ、近代日本への第一歩で、家を蹴れ、父母を蹴れという悲しい激情が浮上することもありうるのである。

「近代日本の知識人の思想的性格と日本特有の家族制度（家制度とよばれる）の関係というとき、すぐに思い浮ぶことからの一つは、日本近代の知識人の思想

の歴史が、いわば家からの解放を求めるさんたんたる抗争の歴史であったという印象であろう。」<sup>(29)</sup>とのべたのは橋川文三であるが、まさしく、家による拘束とそこからの個人の解放は、日本の近代精神史の上から、決して欠かせない難問の一つであった。

多くの場合、革命のため、思想のために、家族を放擲してやまぬということは、現実世界からは、かなり遠い感情であった。

小林は次のような発言をするようになる。原始共産制社会は、実は身辺にあると。

「家長を中心として一家が団体である。其処には私有財産もなく、共働、共有だ。……（略）……子供を育てるためには、一家の中心にある人は労作をしなければならぬ。一家に病人があればその人は誰よりも多く消費するが、決して外の人は不平は云はないであらう。……（略）……こうした家族主義の特質は、今日、封建的な形骸を破って、新しく我々に受けとられなければならないのではなからうか。共産主義が夢見た様な社会は我々の足下にあったのである。」<sup>(30)</sup>

次に問題にしたいのは、家族と連動する問題であるが、小林の故郷農、土への思いである。農本主義的

心情と呼んでもいいかもしれない。彼の獄中における沈黙考の世界で、重要に位置をしめたものに故郷がある。具体的には故郷の山であり、川であり、田畑である。また、そこに住まいするなつかしい人たちの顔である。故郷の自然に抱かれたこの夢を小林はよく見たという。

「山はユートピアを生む。今獄中にある彼を、色々の煩悶的闘争の世界から遠ざけて静かな山に連れて行く。それから夫へと夢想して行く。菅原の様な奥地で、世間を離れて開墾事業に従事したらどんなに愉快であらう。先づ三丁歩も、それを徐々に切開いて、しかも真黒になって労働に従事する。そこには創造的農業、芸術的農業が展開さるゝ、それは土に還る生活だ。こういうふ夢は、毎日小野に繰返されて居た。<sup>(31)</sup>」

近代人が傷ついた肉体と精神を癒す場は、将来ありうるかもしれないユートピアの場合もあるが、これまでに通り返ぎ、経験してきたあの山、あの川、あの土のある故郷の風景の方が、より具体性を持ち、より現実性を伴うものとなる。どれほど貧困と矛盾に満ちた農の世界も、傷口を癒してくれる空間としては十分な機能を果たすのである。美と郷愁と慰労が、汗も血もぬぐ

い去ってくれる。つまり村落共同体から毒氣という毒氣は、すべて抜き取られ、山紫水明の空間があるだけのものとなる。貧は美と化し、糞尿の悪臭は香水のかおりと化す。ふるさとを唄いあげた文部省唱歌も大いにその役割を果たしていたのである。<sup>(32)</sup> ふるさとと農本意識は結びつき、皇国農本建國論は国是となつてゆく。

小林にも農本主義的精神が根底を流れている。転向と農本主義との関係は極めて強いものがある。つまり農本主義的感情は、転向の大きな動機となるということであつた。転向者ならずとも、多くの知識人が、わが闘争に破れ、傷つき、また学校という場で学んだ近代的「知」の限界とその傲慢さ、無効性を知った時、彼らは農の世界、土の世界に降りていったのである。ここには、あらゆる辛酸を洗い流し、溶解してくれる空氣があつた。階級的闘争も、貧のリアリティーも、猜疑心も、すべて溶かしてくれる魔法の器として、農の思想、土の思想はある。

抽象的相対主義とニヒリズムの不安のなかで、身の置きどころを失つてしまった人たちにとって、この農や土への回帰する思想は、とにかくにも絶対的価値を持ちえたのである。<sup>(33)</sup> 小林は当然のことながら、農民

に最高の価値を与えて次のようにいう。

「私は農民が国家的要素として最も重要な役割を果して居り、……（略）……其は直接生産に携わって居るのみならず、国家の物質的な力（即ち国防武力）は農村出身の人に依って大部分支えられて居ると云ふ事實は、農村の健全なる発展なしには日本国家の健全な発展はあり得ぬことを示すものである。それは殊に日本精神の本質的なものを（即ち家族精神）最も多く具現して居る。<sup>(34)</sup>」

ここに来て、小林の精神は安定し、純粹にして無比の再生を期す覚悟が生じたのである。

次は家族、郷土とならんで、その延長線上にある民族、国歌への認識の変容である。それまで階級的視点にのみ眼を奪われ、攻撃の対象としてしか見なかった民族の心情や天皇制が、じつは多くの日本民衆の心情と密着していることに小林は気づいたのである。抽象的人類史、階級闘争史における己よりも、具体的日本人としての現実的存在に視点が移行してゆく。共産主義運動を通じ、世界国家の平和を願うことは間違いない。しかし、静かに己の現存在をふりかえる時、小林はどこまでも日本人であり、天皇制国家の一員で、

その意識は、深い心層の部分に宿っていることを改めて知る。次のような意識の転換を余儀なくされる。

「世界国家は人類の理想であるが、今急に実現さるゝものではない。吾々日本人は、日本と云ふ国土を三千年の歴史を持って、その上に初めて吾々の存在的事実があるのだから、先づ日本人たることを基礎として考へ行動せねばならぬ。<sup>(35)</sup>」

「万国の労働者団結せよ！」は立派なスローガンである。しかし、それぞれの国がそれぞれの歴史的特徴を持っていて、宗教も政治も文化もそれぞれ固有のものを有している。世界人類を画一的目標に向けて束ねることなど、所詮無理な注文ではないか。やはり祖国のために、ということに傾斜してゆく己の心情を認めざるをえない小林であった。日本人の一人としての忠誠の感情を放擲してまで、闘って獲得するに値する崇高なものが、この世に存在するとは思えないし、共産主義が高唱する絶対的理想的社会など、現実世界に存在するものではないと、彼はこういう。

「宇宙にも陰陽のある様に、国家にも絶対的な社会状態はあり得ない、皆相対的なものだ。……（略）……従って絶対的な共産主義の社会は成立しない。<sup>(36)</sup>」



日本悠久の歴史も現実世界も把握する努力を怠り、革命だの、絶対的共產主義だのと叫んで拠所にしていた空虚な理論が足下より崩れてゆくことに、人は気付く時がある。抽象的世界永久平和を願ひ、そのための闘争ゆえ、次々と貧窮し、倒れてゆく家族や、民衆の日常を眼にする時、この運動は、真に己の血の部分から湧出するものに基づいているのか否か、という不安に襲われる時がある。このことを無視して行う運動の帰着するところは、自爆が転向以外にはない。

前述したように、吉本隆明が、転向は「日本の近代社会の構造を、総体のヴィジョンとしてつかまえそこなつたために、インテリゲンチヤの間におこつた思考変換<sup>(37)</sup>」だといったのは、けだし当然のことであつた。金科玉条のごとく信奉していたコミンテルンの方針に強い疑念を抱き、これまで軽蔑していた民族や国体の問題が、小林の心中を俄かにとらえはじめるのであつた。階級的視点に立脚し、同志を裏切ることなく生き抜くか、それとも、日本人として悠久の歴史に生きるのか、これは獄中の小林にとって難問中の難問であつた。生涯をこの共產主義運動に捧げることが一度は決意した小林にしてみれば、この崩れゆく己の姿に無念の

思いを抱くのは当然のことである。弾圧を恐れ、安全地帯に回避しようとする彼は、周囲から聞こえてくる「卑怯者」との罵声に、ただただ踞るばかりであつた。

「あゝ、全国の労働者農民は何と云ふだらう。長野県の小野と云ふ奴は、労働党の中央委員にもなつて居るくせに、あの階級的な行動を傷つける陳述は、彼は弾圧に恐れて、無産階級を裏切つたのだ。小野は其の声を幾回も自己の心の内に聞いた。これは恐ろしい声であつた。彼の心は掻き乱された。<sup>(38)</sup>」

同志に対する裏切りという罪の意識、家族への熱い思い、日本人としての自覚など、小林は千々に心を碎いた。不眠症に襲われ、廃人同様となつた。獄中で彼は、ついに自殺を計画し、実行に移すが、死に至ることは出来なかつた。

この自殺計画に象徴されているように、一時は己の存在そのものが許されず、消え失せることによつてしか現実を回避する方途はないところまで、小林は追い込まれていたのである。この瀕死の状態を救つたのは、教師藤井恵照の宗教的指導であつた。この宗教体験を通じて彼は転向を徹底的なものにした。この藤井の教誨によつて、小林は罪深い己を知り、いかなる償い



によっても償い切れない罪をわがものとしたのである。ただただ、己の無力、無効を恥じ、認識し、絶対者にすべてを委ねるしか道のないことを悟った。共産主義に絶望し、親鸞に心酔してゆく小林の姿がここにはあった。己のすべてを如来に預ける以外に道はない。正義のため、世界全体の労働者、農民のためと称し、救世主のつもりになって行動してきた己の自力など、いかほどのものでもないことに小林は気付いた。愛する家族さえ救済出来ぬ正義とは何か。後生大事にしていた己のプライドなど、単なる幻想で、そのようなものはすべて捨てて、無力な己を如来に委ねる道を彼は歩むことを決意する。『歎異抄』、『教行信証』などが彼の周辺にはあった。念仏三昧の日が続く。教誨師藤井に、小林は如来の顕現を仰ぎ見る思いがしたという<sup>(39)</sup>。

共産主義、およびその運動は絶対的正義であり、世界人類のためであり、己はその聖なる運動の指導者であるといった意識が、いかに傲慢なことであり、それがまったくの幻想であるとの思いに小林は到達した。現実世界に完璧な人間の善なる行為などありはしない。彼はこういう。

「聖人は此の吾々を究明して行く時に、如何なる万

行諸善も、其の完璧を期することが出来ぬことを知った。即ち『万のこと、みなもて空ごと、たわごと、まことあるなし』を十分に認識されたのだ。吾々の此の人生に於て、人間の行為に於ては、如何にそれが善事であつても、それだけでは駄目なのだ。否却って自己の力を信じて居る所に破綻が来るのだ。<sup>(40)</sup>」

こうして小林は、清沢満之が知および肉体による徹底ののちに到達したように、自力というものの無力、無効を徹底的に教えられ、如来になにもかも預けることによって、精神の安定を獲得するところに到達したのである。獄中で体験、獲得した宗教について彼は次のようにのべている。

「宗教とは、現実の不完全なる我を否定し、仏者の世界、即ち彼岸の世界——完全なる世界——への不断の進展そのものを云ふのではなからうか。従つて宗教とは、彼岸への憧れである。欲望である。人間が完成されたものでない以上、常に永遠の生命と、限りなき光明への到達を望んでやまぬものである。<sup>(41)</sup>」

刑期を終え、出獄した小林は、今後、共産主義運動、

農民運動といった反権力、反国家的行動は、すべて中止するといったような、消極的姿勢ではなく、他人に転向をすすめ、また、転向者の将来について懸命に援助活動をするといった積極的方向へゆくのであった。国家権力によってつくられた更生保護団体である帝国更新会での活動、その内部に設置された思想部の責任者としての懸命な努力によって、彼の転向は完成するのである。

わが信念に基づいた反体制的運動家が、国家権力の弾圧に敗北を喫し、獄中で転向して、体制擁護派の間として再生するという、方向転換を、小林の無節操、臆病、偽善と呼ぶことは、それなりの正当性を持つてはいる。しかし、そのような結論づけでは、思想的に小林を見たことにはならない。ともかく、帝国更新会における小林の仕事ぶりに注目しておこう。そもそもこの帝国更新会なるものの正体は何なのか。ここでの彼の活躍こそ、転向の完成とかわるものとなる。共産主義から身を引くことを決意しただけでは、転向は完成したことにはならない。二度とそのような行為を繰り返さないよう、体質改善をし、その上で、積極的に国家体制に協力することが必要であった。厳罰を課

すだけで、転向させることが成功するはずはない。「アメ」と「ムチ」は、政治支配の常套手段であるが、この帝国更新会は、まさしく前者であった。小林は帝国更新会をこう説明している。

「いままでの保護団体は、刑余者の保護に重点をおきたいわゆる免囚保護事業であったが、新しく猶予者の保護事業の分野をも開拓したのである。家族主義に基づいて、役員も保護される者も一つの家族であるとし、互いに助け合つて更生を計ることを保護の根本理念としたのである。<sup>(42)</sup>」

小林がこの帝国更新会にかかわったのは、昭和六年の仮釈放になった直後からであり、この時点で、彼は新しく人生のスタートを切ったのである。昭和九年には、この帝国更新会に、新しく思想部が独立したかたちをとって発足した。彼はその責任者となって活躍することになる。

思想事件関与者が就職難を極めるなか、小林は当人およびその家族に対し、就職の斡旋、生活の援助など、己に可能な限りの力を奉げたのである。帝国更新会の思想部の事業内容は次のようなものであった。

「A、在監中——未決又は既決中の思想犯人並其の

# 家族の救援

B、釈放後——①就職並授産の幹旋並職業補導（就業技術及知識の再教育）、②就学、復校、勉学の幹旋、③寄宿舎並療養の設備、④修養会、座談会、講演会の開催、⑤結婚の幹旋、転向者家族の保護、⑥恩賜記念農場の開設、⑦警視庁並所轄署との連絡、⑧弁護士を紹介幹旋、⑨修養、研究、娯楽、図書設備<sup>(43)</sup>」

これらの事業の内容は、あらゆる運動家およびその家族の日常から将来にわたる総合的支援にかかわるものとなっている。小林の日常は多忙を極めることとなる。彼はやがて、大孝塾<sup>(44)</sup>に関係し、さらにそれを発展させ、国民思想研究所の主事となる。「転生」（のちに「国民思想」）は、その機関誌であった。「転生」発刊に際しての「辞」に注目すべき文言がある。その一部を引いておこう。

「我等は過ぐる昭和年間、共產主義が幾多の誤謬を有したるにも拘わらず、日本思想界に多大の影響を与へ、且つこの運動に従事したるものが救世的情熱を以てその全生命を傾倒した事実を想ふ時、更に彼等が日本国民としての真の自覚に立ち、自己の完成を期すると共に、再びその全精力を傾注して国運の発展に献身し、

以て奉公の誠を致さんことを切念せざるを得ない。<sup>(45)</sup>」

これまで、共產主義運動に全生命を傾注してきた人間であればこそ、そのエネルギーを国家体制擁護、尊王国家発展のために使用するならば、彼らは極めて大きな大きな貢献をするであらうというのである。小林も共產主義運動に専念し、しかるのちに転向した人間である。そうであればこそ、今日の己があるという。獄中生活は、彼にとって修養の場であり、人格陶冶、新たな自己発見の場であった。転向の前も後も、小林の精神の深層は変るところはない。眼前に浮上してくる諸問題と、真摯に取り組み、反省を繰り返し、誠実に、ひたすら他人のために活動をしたのである。

転向後の帝国更新会などを通じて、小林に救済された人は多い。裏切者、卑怯者、権力の手先などと陰口をたたかれながらも、彼はそういう人にも救いの手をさしのべている。この行為は、もう、ほとんど宗教的営為といってよからう。石堂清倫は小林のこの行為を次のように評している。

「一部の人は小林を司法権力の手先として非難した。しかし彼はこれに対し、一言も弁解を試みたことはない。彼は前後数千名の転向の世話をした。そこに集ま

る人が、彼を利用するだけのものであろうと、不純な動機によるものであらうと、一切差別をしなかった。その心情や決意を一度も問いただすことはなかった。無条件ですべての人に接した。彼のため生活をたてることのできた人は多いが、<sup>(46)</sup>」

この無償の行為遂行に到達するまでに、小林は幾多の経験を重ねてきたが、なかでも獄中での教誨師との出会いを通じての宗教体験は、彼をして無の世界に突入させ、自力の無効性、他を責めることのむなしさを悟る境地に立ち入らせたのである。

獄中での拘束された生活は、共產主義との決別ということを、はるかに超えて己を知り、己の無力さを自覚し、大いなる力へ己を委ねる以外に生きる道のないことを発見する時間であった。従って、小林にとって転向とは、「単に向を変へたと云ふ様な生易しいものではなくしに、それは、宗教的な意味で云ふ再生とか、新生とか転生とかと云ふ言葉の方が正しいのではないだらうか。<sup>(47)</sup>」ということになるし、また、「共產主義者にとって、拘禁生活と云ふことは、じつに自己を批判する絶好の機会であつたのである。<sup>(48)</sup>」ということになる。

この小林の歩んだ道は、荒ぶる霊が幾多の変遷を重

ねて、ついに和霊へと変容してゆく過程のようにも思えてくる。国家権力にとって小林ら共產主義者は決して許すことの出来ない、反権力的集団であり、追放すべき集団であった。しかし、小林がこうして検挙され、転向し、国家体制に積極的に協力してゆく姿をみる時、これは日本的土壌から生れた反王権の歴史のようでもある。

王権というものが長期にしかも広範囲にわたって、その体制を維持、強化してゆく際に、欠かせないものの一つに、王権そのものへの攻撃の許容とその懐柔策がある。王権が、かなりのところまで批判、攻撃され、追い詰められるという激しい憤怒とそのエネルギーを、王権自体が必要とするということである。一般的通念となつてゐる反倫理的行為、反モラル、反人道的行為を王権は欲しがる時がある。王権という怪物はいつも春風駘蕩する環境のなかで、農耕儀礼に明け暮れしているわけではない。怨霊に戦慄しながらも、時としてその存在を許し、逆にそのエネルギーを栄養分として、強く、大きく、生氣あふれるものになてゆく。怨霊の側からいえば、当初は王権に絡み、それを窮地に追い込むこともあるが、究極的には、王権と握手する。怨

霊、荒ぶる霊は遂に和霊となり、霊験あらたかなる神として丁重に祀られることになる。

小林は遂に、国家権力が最も欲しがる和霊に転化していったのであろうか。それでも、王権は彼から監視の眼を逸すことはなかった。しかし小林は、もうそういう地点からはばるか遠くの世界で呼吸していたのである。

注

- (1) 思想の科学研究会『共同研究・転向』（上）平凡社、昭和三十四年、二四頁。
- (2) 同上書、一頁。
- (3) 同上書、同頁。
- (4) 同上書、同頁。
- (5) 同上書、三頁。
- (6) 同上書、五頁。
- (7) 同上書、六頁。
- (8) (一) は引用者。
- (9) 同上書六頁。
- (10) 本多秋五『増補・転向文学論』未来社、昭和三十九年、二三九頁。
- (11) 同上書、二四八頁。
- (12) 同上書、二一六頁。
- (13) 同上書、同頁。

- (14) 同上書、同頁。
- (15) 吉本隆明『吉本隆明全著作集』(13) 勁草書房、昭和四十四年、六頁。

- (16) 橋川文三『歴史と体験』春秋社、昭和三十九年、六六―六七頁。
- (17) 荻野富士夫『思想検事』岩波書店、平成十二年、六八頁。
- (18) 小林杜人『転向期』のひとびと、新時代社、昭和六十二年。
- (19) 小野陽一（小林杜人）『共産党を脱する迄』大道社、昭和七年。
- (20) 同上書、二〇頁。
- (21) 同上書、二六頁。
- (22) 同上書、四四頁。
- (23) 小林杜人『転向期』のひとびと、二〇頁。
- (24) 小林杜人『共産党を脱する迄』、五二―五三頁。
- (25) 小林杜人『転向期』のひとびと、二二頁。
- (26) 小林杜人『共産党を脱する迄』、一〇頁。
- (27) 多くの資料がそのことを裏付けているが、橋川文三の指摘をあげておこう。「いわゆる転向の動機としてもっとも多く見られるのは『近親愛その他家族関係』の動機であり、それについて『国民的自覚』であったことは各種の資料から明白に知られる事実である。』（『標的周辺』弓立社、昭和五十二年、一五八―一五九頁。）
- (28) 小林杜人『共産党を脱する迄』六九頁。
- (29) 橋川、前掲書、一三七頁。
- (30) 小林杜人編・著『転向者の思想と生活』大道社、昭和十年、一五頁。
- (31) 小林杜人『共産党を脱する迄』、六六―六七頁。

- (32) 文部省唱歌とふるさとの関係を鋭くついたものに松永伍一の「ふるさと考」(講談社、昭和五十年)がある。
- (33) しかし、このことは近代への反逆のように見えはするが、結果的には体制内に吸引されてゆく運命を辿った。私はこうのべたことがある。「近代日本の知識人の多くにとつて、帰農は具体的に農業や農村に帰ることを含みながらも、それ以上に観念世界での農に寄り添おうとすることであり、米づくりの国への帰郷を願うものであった。……(略)……しかしその営為の果てにもたらされたものは、現実回避と自慰行為の拡大のみであり、近代を総体とし、それを真に超えるものではなかった。」(近代日本思想の側面——ナショナリズム・農本主義——八千代出版、平成六年、二五四頁。)
- (34) 小林杜人編・著『転向者の思想と生活』、四二—四三頁。
- (35) 小林杜人『共産党を脱する迄』、八〇頁。
- (36) 同上書、同頁。
- (37) 吉本隆明、前掲書。
- (38) 小林杜人『共産党を脱する迄』、八三頁。
- (40) この時の小林の心情に注目して、石堂清倫は次のようにのべている。「小林が獄中で、死をもつてこれまでの共産主義思想と訣別をはかり、一転して親鸞により回信をとげた。それは刑務当局の心証をよくしたり、刑の軽減を期待しての策略ではない。罪ふかい己れが絶対者である仏陀によって救われたという信念に達したのである。」(『異端の視点——変革と人間と』勁草書房、昭和六十二年、三一七—三一八頁。)
- (41) 小林杜人『共産党を脱する迄』、一五六頁。
- (42) 同上書、一八〇頁。

- (42) 小林杜人『転向期』のひとびと、二八—二九頁。
- (43) 同上書、六四—六五頁。
- (44) 大孝塾とは次のようなものであった。「三菱合資株式会社であったと思うが、思想転向者の更生保護事業のために多額の寄付金が司法省に寄せられた。当時の司法次官・皆川治広がこれを基金にして、大孝塾研究所を創立したのである。」(小林杜人『転向期』のひとびと、二二—二三頁。)
- (45) 同上書、一二七頁。
- (46) 石堂清倫、前掲書、一三八頁。
- (47) 小林杜人編・著『転向者の思想と生活』、五頁。
- (48) 同上書、六頁。

# 主要参考・引用文献

- 小野陽一(小林杜人)『共産党を脱する迄』大道社、昭和七年
- 小林杜人編・著『転向者の思想と生活』大道社、昭和十年
- 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』岩波書店、昭和三十一年
- 思想の科学研究会『共同研究・転向』(上・中・下)平凡社、昭和三十四年—同三十七年
- 橋川文三『歴史と体験』春秋社、昭和三十九年
- 本多秋五『増補・転向文学』未来社、昭和三十九年
- 藤田省三『天皇制国家の支配原理』未来社、昭和四十一年
- 磯田光一『比較転向論序説——ロマン主義の精神形態』勁草書



房、昭和四十三年

吉本隆明『吉本隆明全著作集』13、勁草書房、昭和四十四年

藤田省三『転向の思想史的研究―その一側面』岩波書店、昭和五十年

安田常雄『日本ファシズムと民衆運動』れんが書房、昭和五十四年

中嶋誠『転向論序説』ミネルバ書房、昭和五十五年

近藤渉『日本回帰』論序説』JCA出版、昭和五十八年

小林杜人『転向期』のひとびと』新時代社、昭和六十二年

石堂清倫『異端の視点―変革と人間と』勁草書房、昭和六十二年

鍋山歌子編『鍋山貞親著作集』(上・下巻) 星企画出版、昭和六十四年

石堂清倫『中野重治と社会主義』勁草書房、平成三年  
坂本多加雄『知識人―大正・昭和精神史断章』読売新聞社、平成八年

荻野富士夫『思想検事』岩波書店、平成十二年

鶴見俊輔・鈴木正・いいたも『転向再論』平凡社、平成十二年